

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十三卷第十号（通巻第一五四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第154号

2. 2007

文机

品川鈴子

文机に蠟梅一朶誕生日

誕生日障子の疵を継ぎ張りす

誕生日自祝の白魚お頭付き

うたた寝に計崩れつつ屠蘇の酔



妹の訃に震へ悴み眉描けず
寒の死しに水みずに唇やや開く
目に遺る姿ながら牡丹雪
眠る山ふいに響どよ動もす引導鐘
曇るるに引導鐘の突とつ拍びょう子し
悴みて挟み難きは喉仏



第十一回ぐろつけ賞発表

受賞作品

俳句の部

秋 麗

藤田 宣子

春蝉や身を繋がれし外科の部屋
臓器手術同意書に印梅雨寒し
魚骨めく傷と横たふ水無月尽
両手の指胸に広げて遠花火
心臓の弁変り身の秋麗
チタン弁「三十年持つ」と年明くる
初釜やこだわりの朱の平棗

受賞作品

俳句の部

百花の恋

森田 子月

ここに待つためらひなきやゆすら梅
伝えてと柳絮りゅうじよへ息を吹きかける
春寒に長短針は重なれど
モノレールに透けるカーテン春の暮れ
花冷えのドア一枚のギターの音
春眠に靴下片方ぬげていて
大気圏入道雲の産まれたて

玉 鈴

大阪 赤木真理

産み月の姉をいたはり秋桜
かけ算の九九そらんじて春炬燵
トランプで恋を占ひ春炬燵
子育ても少し落ち着き花衣
夫少しいぢめてみたり牡蠣の飯

兵庫 秋田 直己

着ぶくれて消火訓練儘ならず
天高し自治会館の起工式
酌み交す熱爛一本もう一本
赤坂へ銀杏黄葉を通り抜け
冬薔薇庭の手入れは妻任せ

愛媛 足利 錠子

ばつさりと剪定されて庭広し
金一封集める若衆秋祭り
秋暁に祭り太鼓の遠くより
かくれんぼ鬼おきざりに秋の暮
学友の一人づつ減り雁渡る

吟

愛媛 足利 徹

まつすぐに並ぶ大根抜きし穴
人だかり覗いて見れば返り花
七五三鴉を追ひて転びけり
石垣のみ残る城跡鷹渡る
凧の揉む竹山の瀟条と

大阪 尼寄太一郎

機音の絶えし河内の蝉時雨
暮敵の持参の林檎怒り肩
醉芙蓉縮緬皺に凋みたる
死亡欄まづ享年に冷たき目
木犀の香を潜り抜けゴミ出しに

兵庫 荒木 治代

身に入むや筆圧弱き母の文
駅頭に思はぬ人と遇ふ良夜
径尽きて踵を返す柿の里
駅裏に残る旅籠屋秋灯
推敲の果ては原句にもはや冬

大阪 池田 かよ

心なき放置自転車草もみじ
レリーフの烏天狗に初時雨
絵タイルの道は画廊へ木の葉降る
寄り添うて小春日和の千羅漢
冬波のしぶき混じりの砂つぶて

大阪 石橋 萬里

応援もつい走り出す運動会
秋うらら河馬は歯と歯で争へる
能面の歯のなき笑ひ烏瓜
切株に得体の知れぬ茸密
骨密度もつと鍛へよ破蓮

愛媛 今井 忍

開校の人文字つくる秋天下
人集る辻饒舌の林檎売り
朝まだきラッパ吹きたる文化祭
菊運び込む式典の公民館
挨拶の稽古ビデオに撮る夜長

香川 齋部 千里

道問へば讃岐のなまり石路の花
寄鍋にやがて解けゆくわだかまり
どこまでも獣の細き枯野みち
枯蓮の折れて現はる露坐仏
もみじ葉の交りし蓑で枝を垂る

兵庫 浮田 胤子

大山人又奴唄つかまへる
過疎の村柿がたわわに生りぬたり
食前に山ももの新酒鄙の宿
子のやきしぐいのみに新酒なみなみと
帰省子が局地豪雨にたたられて

兵庫 馬越 幸子

里坊の奥へたどれば紅葉濃し
昏れ紅葉猿は比叡へ寝に帰る
里坊の紅葉昏れゆくこと迅し
柿紅葉芭蕉の杖の置きどころ
誓子邸遺すキャンパス片時雨

薬草歳時記

(一五三) シクラメン 篝火花

須賀悦子

シクラメン人を恋ふ夜の眉蒼し

鈴木真砂女

何年か前に布施明が歌って大ヒットした「シクラメンのかほり」のイメージからこの花はロマンチックで恋の香りがするように思われ、真綿色、薄紅色、薄紫色は本当に美しくほのぼのと暖かさを感じさせ芳香性のものである。

花屋の店頭にシクラメンの鉢植えが並んでいないときがないのではと言われる程シクラメンは年中栽培されて季節感も薄れてはいるが、やはり寒い中での春の花である。

原産は地中海沿岸とクレタ島、ロードス、キプロス諸島と謂われるが、シリア、レバノン、イスラエルなどの海岸地帯、アフリカ北岸のチュニス付近にも分布し、現在は世界中で栽培されている多年草である。家庭栽培でもこのシクラメンの花期は冬から春であり、毎年晩秋になると球茎から小さな芽がよきよき出始め、年末からお正月には太い花茎が葉茎の間からたくさん伸びてきて先端に下垂した大型の一朵を開く。花の時期は長く晩春までひとつの球

茎に密集して花を咲かせる。

開花した花びらの形が炎立つようであったかも篝火が燃えているのを思わせることから「カガリバナ」と植物学者の牧野富太郎博士が名付けたが、英語名の Sowbread を訳して「豚饅頭」、中国では仙客来、一品冠とも呼ぶ。

花の色素はアントシアンの一種エニン、球茎にはサポニン性配糖体のシクラミンを含む。昔はヨーロッパで下剤として薬用にされ月経痛、頭痛など鎮痛薬にもなったが、十九世紀になって鑑賞用としての育種が盛んに行われ花の色も多く八重咲き、大輪、ミニ種、搾り花等次々できていく。

現在、シクラメン属植物は十五、六種が知られているが球茎が半ば地上に出ているのが特徴で花後果実が破れると直径2〜3ミリの種子が出来る。8〜9月頃に蒔けば発芽するので夏は暑さを避け風通りの良い所に置き、冬は日当たりのよい十度以上の窓辺か温室に入れ育てる。

又、開花した株を翌年も咲かせるには6月頃より水を遣らず日陰の雨の当たらない所に置き、9月頃になってから少しずつ水を遣り日にあててやると芽を出し始める。その生命力の強さにはいつも驚かされるのである。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

「花だより」湯浅明著 東大新報出版社
著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

シクラメン (カガリビバナ、ブタノマンジュウ) [シクラメン属] (さくらそう科)

Cyclamen persium Miller
(篝火花、豚饅頭)

花期：
冬～春



さく果

花の断面図



前年の球茎よりの発芽：
11月下旬



須賀悦子画

球茎の断面図



葉用部分：球茎



E. S.

「白鳥の湖」の群舞やシクラメン

鈴木 愛子
ぐろっけ

シクラメン引越しの荷の中に咲く

宮本 鈴

シクラメン風吹き過ぎる街の角

飯田 龍太

恋文は短きがよしシクラメン

成瀬 桜桃子

ばらばらに八方へ翔びシクラメン

沢木 欣一

お転婆な花片を持つシクラメン

田川 飛旅子

シクラメンはシクラメンのみかなしけれ

中村 汀女

シクラメン花のうれひを葉にわかち

久保田 万太郎

シクラメンたばこを消して立つ女

京極 杞陽

咳入るや涙にくもるシクラメン

白田 亜浪

鈴の奏

品川鈴子選

故里は甥の代なり榎櫃の実
大坂 今谷 脩
セーター撫でてのひらにこりにこりかな

幾代経し茶の花なるぞ神峯山寺
老の指ぽきぽき鳴らし筆始

姉のこと偶に気になり菊日和
香川 田中真由美

旅ばなし聞いて欲しくておでん酒
短日の話し相手は指人形

不機嫌な手が大根を厚く剥く
縫ひ針に糸の通らぬ冬仕度
大坂 吉田 和子

庭石の片足蟻蛸動かざる
嫁仕度話弾める良夜かな

亡き母の小言に目覚む朝寒し
お迎への園バス待つ間日向ぼこ

香川 井上 綾
胼の手にマニキュア塗りて参観日

霜焼に試験勉強一休み
水洩と涙混じりて言い訳す

天守より見下ろす菊花展の富士
大坂 宮村フトミ

大手門ささ左右うに一畳の懸崖菊
弟に諭されてをりおでん酒

白菊や供華は狭庭で事足りる
蓑虫と我慢くらべの懸垂児
香川 石川 裕美

白粉花の粉顔に付け下校の子
好物の無花果六個飯代わり

温め酒饒舌となる義兄弟
撮影はかしこと追ひし秋没り日
兵庫 高橋 大三

顔中がピアスの娘青蜜柑
やや寒に母読む絵本耳貸さず

秋日和児も携帯の電話持ち
左右見て渡る猫あり秋うらら
兵庫 武田 貞子

但馬路を行けば行く程キリン草
教えぬにチワワは縁で日向ぼこ

芒原子が消え親が消えてゆく
秋日向逸れ鴉と睨み合う
大坂 北川 光子

風騒ぎ拾いどきかと銀杏の実

秀 鈴 記

老の指ぼきぼき鳴らし筆始

今谷 脩

書初めの用意を整え、能筆を披露する意気込みが、おのずと指の準備運動となり、老いても関節のぼきぼき鳴る小気味よさ。この動作は心身の健全さや、揮毫にも自信の程を物語る。

不機嫌な手が大根を厚く剥く

田中真由美

一般に包丁捌きの巧拙は大根の「かつら剥き」などの均等な薄さで判る。そして常々主婦としての腕前も知っているが、何故か不思議と分厚く剥いてしまい我を疑う日もある。この不調は指が拗ねているのに違いないと、自己弁護したくもなる。

縫ひ針に糸の通らぬ冬仕度

吉田 和子

寒さが迫る頃は、冬仕度に気が急かされる。日が短くて

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 佐田昭子 〃

*選句は全て 品川鈴子

夕べには針に糸が通り難い齡となったのも一種の焦り、あれこれ繕いながら厳冬に備える構え。生涯の冬仕度もそろそろ心掛けて、怠れない一大事。

お迎えの園バス待つ間日向ぼこ

井上 綾

子供が幼稚園に行くようになると、送り迎えが大変だけれどやつと少し時間的余裕が出てくる。今まであまり他のお母さん達と話す機会も少なかったが、迎えのバスを待つ間、日向ぼっこをしながら楽しい会話の輪が出来る。にぎやかで明るい笑い声が聞こえてくるような日向ぼこである。

大手門左右に一畳の懸崖菊

宮村フトミ

菊花展が催されていて城の正門の左右には一もあるような垂れ下がるように作った盆栽の懸崖菊のみごとさ。一句目の天守よりの句のように見下ろすのも見事な菊花展。よく晴れ渡り富士山も見える。大阪城なのでしょうか。いか

にも秋らしい景。

蓑虫と我慢くらべの懸垂児

石川 裕美

蓑虫は別名鬼の捨子、鬼の子などとも言われ、枕草子によればちちよ、ちちよとはかなげに鳴くとある。樹木の枝や葉を糸で綴つてその中に潜み、蓑を負うような形をしている。懸垂の出来るようになった児が我慢くらべをしている。メルヘンチックでお母さんのうれしさが佳く伝わる句。

秋日和児も携帯の電話持ち

高橋 大三

私など携帯電話を持ちながらいつも応答がないと怒られるが、今は小学生ぐらいでも上手に使い感心する。そういうお孫さんの写真を撮ったりして自分の育った頃とはあまりに異なる環境を、俳句の材料に楽しんでいらっしやる様子が浮かぶ。

芒原子が消え親が消えてゆく

武田 貞子

東京からだ箱根仙石原などの芒原に行くが一面の芒の

中を行くと、前に行く人が急に消えてしまった様な景によく会う。しかしこの句からはそれだけでなく近頃の親の受難、子の受難の多い世の中の様子まで想像してしまふ句。消えのリフレインが強調されるからだと思つと効果的。

風騒ぎ拾いどきかと銀杏の実

北川 光子

今年の聖夜は銀杏が散らさず黄金色で迎えたところも随所にあつたが、温暖化の傾向と、夜間照明の近くにある葉が落ちにくいらしい。作者は風が吹いている時、今が拾い時かと、銀杏の実を拾いに出る。風騒ぎが実を囁いているように詩的表現。

冬桜廃坑トロッコの客に

濱田ヒチエ

鉱山や炭坑を廃棄したところを、トロッコ電車に乗って行ったら、廃坑を出たところに冬桜が咲いていた。木も小ぶり、梅に似た白色一重の冬桜に今話題になっている夕張の炭坑の跡などを思い描いてしまふ。季語は多くを想像させ語るものだと思わせる佳句。(以下略)